

27年2月
144号

同人雑誌『新』発行と「二重」本誌の取組までお話しください。
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45 東京電機大学内
三田文庫編集部 新同人雑誌部 係

柳澤大悟

最初に、井上達也「北の森の精霊たち」(『山形文学』第110集)です。北国にある動物を処分する施設に事務長として勤めている竹山勝は、県から新たに派遣されてきた動物愛護調査士である石井直子の、色白で他の職員たちから浮いているような姿に視線を奪われます。施設内で孤立したままの石井から、竹山も拒絶されるような態度を取られますが、占いを得意にする中年女性職員によって、二人が同じ夢の世界を共有していることが明かされます。雪の積もる森のなかを彷徨する二匹の熊となつて互いをいたわり合う夢を見る竹山と石井は、やがて現実でも距離を縮めていきます。外界から隔離されたような印象を受ける処分施設での、冬の弱い陽光を肌にする日光浴や、動物を焼却した熱を利用する暖房など、無機質のどこか欠落感がある日常が書かれ、人物の表情の見えなさや相まって独特な作品でした。熊が歩く雪山の幻想的な光景と、細部まで描写される動物の焼却処分の工程、俗っぽく軽薄な職員の会話が入り混じりながらも、清く澄んだ読後感があります。

続いて、丸黄うりほ「永遠をハカにする」(『星座』Vol.14)です。永遠つて何やらね、と問いかけるように語り

始めるのぶこは、死後に自分の葬儀を見て、かつて暮らしていた家にいる夫のけんさん、五十歳を過ぎた息子のこうちゃん、こうちゃんの嫁のはなちゃん、のぶこの元立ちおぢいさん。のぶこの視点は次々と過去の一場面へと移っていき、アニメ絵の女の子のポスターを部屋に張りながら自分でも少女のイラストを描くおぢいさんと、太った体にフリルの服を着て家事と仕事を一切せずに部屋に閉じこもるはなちゃん、病を患い衰弱するけんさんの姿を振り返っていきます。死んだ人間の浮遊するような視点をもつことで、三人称の文章にもかかわらず、のぶこの戸惑いや諦めが伝わってくる生々しい語りになり、家に渦巻く毒気が際立ちます。「五十歳思」と自虐して傍若無人に振る舞うはなちゃんには一貫して迫力がありました。また同誌から、三上弥栄「あるコロニーの、桜」は、コロナウイルスによって緊急事態宣言が出た四月前後を生きる二十代から三十代後半の男女の日常を群像劇的に綴ります。テレワークが広まるなかで、満員電車に乗っていたかつての暮らしが客観的に見えるようになり、同調圧力や無力感、自分だけが損をしているのではないかという怒りに苛まれていく彼らの姿は、実社会でも世代の共通体験となるのではないかと思わせる作品でした。

高坂正澄(元) (『m.o.l』Vol.16)は、二十六年前に妻が失踪して以来、独りで大阪の小さなネジ工場を継営している男の語りで、ライフワークである磨材めぐりの最中に遭

加藤有佳織

久野木ゆき「おたまじゃくしの夢」(『こみゆにてい』第108号)では、六月の風の夜、語り手の部屋へ若いアマガエルが迷い込み、カロと名乗ります。意外にも「ごびらつぶ氏」の詩を語らせた語り手に、カロは打ち解け、蛙と詩情について熱く語ります。モリアオガエルの歌に憧れる彼に、「自分の歌」を持つていたのではありませんかと語り手は訊ねます。するとカロは「歌うことができなくなってしまった」と告白します。恋だけを歌うことに満足できず、抒情と感傷を重ねてしまったゆえ、仲間から離れたのだと言います。自分らしい歌を追求するという意気込みは、やがて孤独と空腹のなかでしばみ、歌も失ってしまったのです。「詩」を探すカロ、蛙の語る夢に敬意を持つて耳を傾ける語り手の佇まい、「からから、ころろ」といった甘く軽やかな擬音語。それらが情感ゆたかな世界を作り上げています。胸を膨らませたカロを見て「ちゃんと肺呼吸なのだな」と妙に納得するあたりも魅力的でした。

志田昌教「極悪レスラー トッコロ・カミカゼの真実」(『長崎文学』第94号)の舞台は一九四七年ロサンゼルスです。第二次世界大戦時、陸軍歩兵部隊としてヨーロッパで

戦った日系二世ジョージ・ヤマグチと妻サエリは、戦を求めてさまよっています。偶然に観たプロレスの試合で、トッコロ・カミカゼという華役に卑劣な戦いぶりで観客を沸かせています。このレスラーが実は部隊の先輩で、かつてのレスリング全米ヘビー級チャンピオンのケン・ツキオカでした。長崎の悲劇を目撃して記憶を失った妻サエリの治療費のために戦うツキオカが、覆面のスーパー・アトミックとの完全デスマッチを行うことになります。このスーパー・アトミックの正体が、ヨーロッパのヘビー級チャンピオンであったドイツ人ハンス・クラウザーと分かり、案外に心温まる結末を迎えます。ブラックユーモアと人情味の混在するおもしろさがあり、歴史的悲劇に口を噤むことのない批評精神を感じました。

田中信子「朝の光のつぶ」(『樹林』Vol.66)は、母に暴力をふるわれる早業が語り手です。いつものように殴られたある夜、小学校二年生のシェンと出会います。ポケットにピカチュウのぬいぐるみを詰め込んでいるのは、そうするとあまり痛くないから、と話す彼もまた傷だらけです。ドン・キホーテで休んでいると、三十代に見える男に声をかけられます。連れられて行った部屋で身体を休めていると、男にねじ伏せられ、「ごめん」という言葉と千円札を与えられます。早業はシェンとともに逃げ出します。寒い夜蘭、明るすぎて平面的なコンビニや量販店、かすかな朝焼け。色彩の不足した風景のなかで、早業の脚を伝う血を

遇する出来事が書かれます。紀伊半島を震源とする地震により断層が揺がり、男は導かれるようにして「彼の地」と「此の地」の境界となつた穴に足を踏み入れ、「すぐに引き返さない」と暗闇から忠告してくる声の主との会話に、かつて失踪した妻の存在を感じます。結婚前の妻が、ほら穴から反響してくる声について、「自分がもう一人いるみたい」という言葉を残していたように、地震による断層の裂け目が、ドッベルゲンガー的な心の解離と結びついているように読めました。誰に対して話し掛けているのか不明瞭な男の語りも、結末の部分で二つの世界の間にある振れが明らかに、背筋が寒くなるような感覚がありました。更に同誌から、内藤万博「ククル チチエン」も印象に残る作品です。海洋生物学の非常勤の研究職を同僚でもあった恋人との関係の拗れから辞め、海洋写真家に転身した佳那子は、沖縄の離島にいる照屋という男から観光宣伝用に撮影を依頼されます。現地でダイビング・スポットとして案内された「シジムン フトウキ」は、海底に人型の岩が並んだ場所で、岩たちの声を聞く「ククル チチエン」が出来たタケシという少年の同行がなければ、村の禁忌で立ち入ることの出来ない場所でした。突如として金切り声を発して人間に襲いかかる岩たちの描写が恐ろしく、浅い海の中で展開する出来事に引き込まれていきます。照屋の目先の利益しか見えていない浅ましさに、ジエゴン

を容赦なく殺してきた漁師の男たちの影が透け、ずしりとした重みがありました。

次に、由布木秀「輝きの中で」(「仙台文学」九十六号)です。インド各地を巡る医学生生のシゲルは、道端で物乞いをする少女や四肢の一部が欠損した大道芸人を目にし、子供の頃の東京オリンピック以前には町で見かけることがあった傷痍軍人やごみを漁る人々の姿、そして一年前に駅の構内で詩集を売っていた臆性麻痺の女性と交わした会話を思い返します。日本に戻った冬、ふと「歳末助け合い」の木箱を首から掲げた教会の女性に百円を寄付したことで、シゲルは表現しがたい違和感に襲われることとなります。貧困や障害で見捨てられながらも社会に繋がろうとする人々が持つ尊厳に触れ、その一方で同じ街にいる教会の女性が神の意志という言葉を使って善意を語っているという展開は、「施すこと」の矛盾について考えさせます。ギラギラ、ビョービョーといった擬音が多用される文章も印象的で、最後にシゲルが「吐きたい」という衝動に襲われたように、言葉では表すことのできない沸き立つ熱気のようなものが読後に残る作品でした。

他にも、嵯川崇「蛇の道」(AMAZON 502号)、田中星二郎「行方」(「i g n e a」9号)、河野龍希「披露宴は踊る」(「富士見坂から」Vol.1)、樹林「Vol.665から、南水梨絵「あらゆる岸辺に着く舟」、藤ひとみ「二人の関係」を面白く読みました。

ぶき取ったピカチエウが強烈な存在感を放っています。

木下衣代「ムロタニさんのとこ」(「黄色い潜水艦」72)は、天竜鍼灸院で「ムロタニさんのところに行ってみますか?」と声をかけられた人々の物語です。眉頼のおけるマツサージ師の佐々木さんに紹介されたものの、誰もが訝しく感じます。それでもおそるおそる訪ねます。驚だらけです、といった意味の分からない言葉とそれにお金を払わなければならないことに憤慨しますが、やがて凝り固まっていた何かが動き始めます。ムロタニさんは、ほとんどの人には見えないものが見え、それを告げていたのです。このやりとりのなかでムロタニさん自身も「言いたいことをいつも飲みこんでるっていう」辛さから逃れているという設定に、人を癒す行為の意味を考えさせられます。

中野真「僕と左手と」(「E」28号)は奥行きのある悲劇です。東京の大学へ進学した恋人の未羽を安心させるため、語り手は自分の左手を渡しておきました。彼女が事故で亡くなり、遺品として左手が戻ってきます。語り手と、彼よりも先に恋人の死を知った彼の左手が、不在の恋人をめぐって作り直す関係を綴る言葉がすばらしく、「左手がこえつてくると真つ直ぐ拳くことに苦勞した」ことによりありとしたリアリティが表われています。

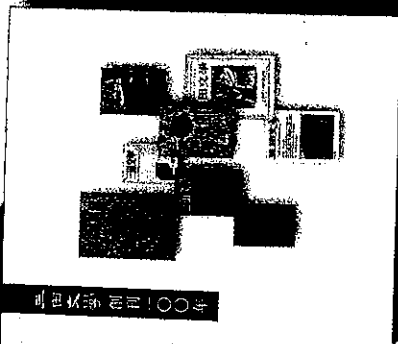
田中星二郎「行方」(「i g n e a」9号)の語り手は、二十年以上勤める百貨店が経営難となり、早期退職を勧め

られます。動揺する彼に、故郷の鳥取での高校野球部同窓会の案内が届きます。そこで彼は「自分にとってのターニングポイントだったあの試合を、誰も覚えていない」と知ります。呆然と海辺の無人駅へやって来ると、忘れていたことさえ忘れていた記憶がよみがえり、あの試合が自分にとっては「真実だ。それでいい」と思うのです。記憶と現在のつながりを抑えた筆致で描く佳品です。

小出和美「三月一日」(「バル」第7号)のゆりこは、自分と同じ三月「日生まれ」の三人の息子たちが昼寝するのを見守り、高校卒業後の日々を回想します。流れ着いた町でユリコさんに声をかけられ、クローン研究をするハカセの助手となりました。研究はグツビーから犬、ヒトへ展開し、ゆりこは「驚くほど似ている子を生み育てています。不意の風で舞った写真は、息子たちはハカセのクローンであると告げています。優しげな不気味さがあります。

くるみ「RAYU」(「北斗」69号)は、小学校高学年の少女の鋭利で繊細な心理描写と異世界ファンタジーが溶け合い、新鮮な手ざわりを持つ作品です。「富士見坂から」(Vol.1)はキラキラと熱を放つ一冊で、とくに河野龍希の「披露宴は踊る」は軽快に読めますがなかなか悪書があります。菊川香保里「葦葉」(「バル」第7号)は一人住まいの老齢の女性を描き、五時五十分には追い立てられるような構成が巧妙です。神通明美「夏果てず」(「ベン」第15号)は裁判所速記官の記録として興味深い作品です。

三田文学創刊一〇〇年展図録



(A4変形・160頁・オールカラー)
 頒価1600円+送料

『三田文学』一〇〇年の端々しい軌跡である、貴重かつ多様な資料を一挙掲載しました。大好評を博した「三田文学創刊一〇〇年展」をいつでもお手もとでお楽しみいただけます。

2010 1910

図録目次

- 1 創刊当時の慶應義塾
- 2 荷風の時代
- 3 水上瀧太郎に支えられて
- 4 三田文学の風人、水上瀧太郎
- 5 焼け跡からの復活
- 6 戦後文壇の中の三田文学
- 7 文学の共和国
- 8 リトル・マガジンの誇持
- 9 21世紀―三田文学の新たな出発
- 10 三田文学と演劇
- 11 三田文学と現代詩人たち
- 12 三田文学と外国文学
- 13 西脇順三郎と若き才能たち
- 14 Gallery
- 15 三田文学の賞の歴史
- 16 三田文学一〇〇年ノート

お申込み・お問い合わせは
 三田文学 編集部
 〒208-8345 東京都港区三田2-15-45 慶應義塾17F
 TEL:03-3451-9053 FAX:03-3451-9057
 E-MAIL: mitabun@mitabunomuse.dti.ne.jp
<http://www.mitabungaku.jp/>

十一月八日、『三田文学』一四三号の合評会が開催された。前回、前々回に引き続きオンラインでの実施であったが、ウェブ上でありながら今回も活発な会となった。

執筆者の小池昌代氏を迎え、関根謙編集長、桑川麻里生副編集長、朝吹亮二編集顧問の他、編集部員二名が出席した。今回は通常より少ない人数での開催となったこともあり、それぞれの意見にスポットが当てられ、濃密な議論が繰り広げられた。

初めに、関根編集長から秋季号の概括が行われた。三田文学の編集長も務めた岡田隆彦の特集や、詩と小説の垣根を超えるような作品の教々、さらに一四二号で掲載し大きな反響のあった蓮藤周作の未発表小説「影に対して」を論じた山根道公氏の評論など、『三田文学』らしい自由でユニークなラインナップが注目された。

その後、特集について意見が交わされ、本誌が岡田隆彦の資料として必須のものになるだろうという朝吹編集顧問のコメントがあり、貴重な評論と随筆が寄せられたことに喜びの声も上がった。同時に、今回の企画が、より広範な文芸誌読者の岡田隆彦の作品に触れる良い契機になってほしいという意見も出された。

粟津則雄氏の古井由吉退悼インタビューに話題が移ると、一頻繁に連句の会で集まるような、昨今ではあまり見られない文学者同士の深い交わりについてお話をいただき、有意義なインタビューであった」という編集部員の報告があり、外国文学に関わる文学者たちが日本の連句という世界で交わることの面白さや、外国語が文学に与える影響についてなど、幅広く議論された。

詩と小説については、山下澄人氏の小説「外出するな、驕りたかぶる

な」が特に話題に上がった。小池氏は、散文詩と小説が混ざり合ったようなこの作品の新しさに魅力を感じると評価した上で、詩と小説という区別を超えた文学の可能性について語った。作品世界にグッと引き込まれるような岡田氏の小説「わたしを、泣かせてください」を含め、本号に掲載された四つの小説は非常に充実しており、読み応えのある号であった。ジャンルの垣根を超えた小説を並べた、『三田文学』ならではの取り組みが評価された。

最後に、それぞれ印象に残った随筆や連載について意見が交わされた。他、第二十七回三田文学新人賞に多くの応募があったことが報告された。コロナ禍ではあるが、創作が盛んになっていることにも励まされ、合評会は充実した雰囲気の中で終了した。

(編集部員 川村百合奏)